

て、朔日より降初、五月中不降日漸に六日、六月中も五日程も右の如く、快晴は無之、七月には四日、八月には六日、右之通不天氣に候得共、當春より麥作の景氣至て宜、近年に不覺作合に相見え候間諸人甚大悅罷在候處、苅頃に成、右之雨續候故、熟し兼存之外日數おくれ苅取候處、一圓實成無御座、諸民大因窮仕候、然共稻作大豆小豆稗等者、例年に勝候作合宜相見え申候間、秋作は十分に可有之と、素人の拙者共は不申及、老農老圃年來の功者共、當秋者豐作無相違由申居故右之季候も左のみ驚不申罷在候處、次第に不順に相成、春一度花咲候藤山吹之類など、六七月頃、山々春の如く花咲、九輪草唐葵抔は、春より霜月まで四度も五度も花咲夏菊十一月下旬迄盛り、九月十月中成に竹の子生じ、九月下旬に蟬なきやます、種々の季候達に御座候、稻作は七月下旬に至り候ても、出穗無之、たまさか穗出候ても葉の内へかくれ、花もかゝり不申穗出るは百分一、其外一圓に穗出不申候、右之次第に御座候間、一粒も實入無御座候、大豆小豆粟稗蕎麥等は八月十三日之夜、大に霜降り、是に當り、種なしに相成、誠に古今未會有之大凶作、元來三四年已來打續半作に不満飢饉に御座候處、當夏麥不作、其上秋作皆無に御座候間、諸穀物一向無之、相場は市毎に引上げ、當時相場は左之通り、

一玄米一升に付二百五十文	一こぬか一升に付五十文	一大豆一升に付百五十文	一搗粟
一升に付二百六十文	一蕎麥一升に付百廿文	一豆腐粕一升に付廿五文	一片春麥一升に
付二百文	一フスマ一升に付六十文	一粗稗一升に付百文	一兩替六貫二三百文 <small>○中略</small>
扱餓死之者唯今國中半分餘と相見え申候間、來正月より三四月迄之内、如何様に成可申哉、難計奉存候、乞食非人往來如市、そのありさま、元來世並宣敷砌伊勢熊野へ參詣仕候に路用澤山所持仕候ても、南部山案子と出立に御座候、まして況此節の體、譬可申者無御座候、眼色憔悴、髪亂れ、眼星の如く、色青くつかれ衰へ、頬骨高く口尖り、手足口の如く、からだ赤裸に菰をまとひし有様、何			